

KANDA NISSHO MEMORIAL MUSEUM of ART

# 神田日勝記念美術館だより



「風景」 1956年頃



KANDA NISSHO MEMORIAL MUSEUM of ART  
神田日勝記念美術館

〒081-0292 北海道河東郡鹿追町東町3丁目2 TEL.0156-66-1555  
<http://kandanissho.com/>

2015.3.31

32

# 巻頭のことば

神田日勝記念美術館長

菅 訓章



日曜美術館で取り上げられて以来、神田日勝記念美術館の知名度は飛躍的に広がっていると感ずる。神田日勝については、過去二回同番組で取り上げられており、そのうちひとつは開館の年に美術館ともども紹介されたものである。それにしても二十周年を過ぎた今、シンボルマークともなった未完の「馬」が醸し出す強烈な衝撃とともに、この特異な画家が注目を集めている。

独立展に四回連続入選を果たし、会友にこそなっってはいたが、入賞歴もなく、ましては会員になることはなかった。しかも代表作品とされる

未完の「馬」は生前人々の眼に触れることはなかった。しかしある年代の画家たちの間の中に「室内風景」が深い衝撃となって記憶にとどめている話を、僕は何度も東京での画家の方々との語りいで聞かされた。今こそ新具象派の画家群像に日勝を定位置させた北海道立近代美術館の若い学芸スタッフの慧眼をひきつづく時期が到来している。一方で神田日勝の馬を描いた画家という印象、もう一方で開拓の苦闘を語るノスタルジアの画家というイメージで、一時期の世代の象徴として消えていく運命を、美術史上に輝く画家として残していく責務を、僕は背負っている。それは単なる町立美術館の地元画家という地元の視線のもっと高い所からこの画家を評価し、認識させていかなければならない。

## 寄稿文

### 神田日勝記念美術館を想う—— 最近の美術館事情から

北海道立函館美術館

学芸課長 久米 淳之



美術館というところには、いくつかの矛盾が潜んでいる。最近はそのが増えてきているように感じられる。しかし館の大小にかかわらず、運営上その矛盾はいつしか観る側、観せる側、相反する視点において、それぞれ正当性をもって、美術館の仕事として成立しているのである。

例えばまず作品保存の問題。あらゆる作品は、物理的な材料から成っているもので、時間の経過とともに劣化して崩壊していく定めにある。作品を後世に伝えていくため、美術館はその劣化を出来る限り抑え

ていかなければならない。とすれば、作品は移動させず、一定の温湿度を保ち、暗所に格納しておくことが究極の保存である。しかし美術館は、それを公に展示し、照明をあて、人と経費を使って作品を危険に晒しながら「活用」していかなければならない。

もうひとつ。最近では収蔵作品の活用例として、他館の収蔵作品をまるごとパッケージで借用する企画展が増えている。美術館のコレクションは系統立てて収集されているので、それだけで展覧会として成立し、「コンセプト」を立ち上げて一点一点作品を各地から借用して構成する企画展と同質の構成が可能で、作品集荷の労力とコストが大幅に抑えられる。貸出す方は作品活用の実績となるし、借用側は、安価で地域で新鮮な企画展として開催できる。また借

用に限らず、収蔵作品による自主企画展自体も多くなってきた。それは美術館をとりまく経済状況が殊更厳しくなってきた。この数年の傾向だが、本来収集作品は常設で公開すべきところ、特別企画展をすることが美術館であるという印象を近代以降つくってしまったがため、展覧会は「企画展」でなければならぬ、というツレンマを露呈している、とみることもできる。

また最近は、「出前」「出張」による美術教室が隆盛している。美術館を飛び出し、作品を携えて、近郊の学校やホールでの鑑賞教室に向く事業。「四画工作」「美術」の時間が削減されていく昨今、これまでは学校に呼びかけ、児童生徒に來館してもらうことに苦心していたが、カリキュラムの操作が困難で、教師個人の熱意に左右され、授業時間を融通して來館できる学校、クラスは限られてしまい、美術館は「待つ」姿勢でしかなかったところから、出前しようという発想が生れた。このことも、本来は保存環境の整った作品鑑賞の場である展覧会への動員を目的として、生徒に社会的な場での鑑賞の機会を提供してきたところ

を、出前で美術の時間が完結されてしまっている。美術館の「箱」の意義が本末転倒している事実には、意外に気づかれていない。以上はあくまで悲観的なものの見方であり、もちろん美術館は、時代の要請に呼び、変わっていかねばならない。そうしたゆるやかで、しかし目に見えて美術館に求められる機能や質が変貌を遂げ、美術館員としての仕事が変わってきていることを感じるにつけ、自分自身が学芸員を志した当初が想い起こされる。

私事で恐縮だが、一九九二年、岩内町の木田金次郎美術館建設の機会に初めて学芸員の職名をいただき、岩内町に勤務した。九三年開館の神田日勝記念館は、木田美術館の一年先輩で、開館にいたる多くの業務を、鹿追町が数年前から迎ってきた道をなぞるように、しかし岩内方式で、ひとつひとつ乗り越えていくように仕事させていただいた。もちろん北海道にあっては中枢の近代美術館、三岸好太郎美術館、一年に開館しただった帯広美術館にも足を運んだが、予算規模など参考にしがたいうところが多くあり、やはり同じ北海道の

郷土画家の、個人名を冠する館として、日勝記念館の存在は果てなく大きかった。平原と海浜、農民と漁夫、早逝の画家と晩年に成った画家、あらゆる点で対家的な作家だが、館として先輩格の記念館には憧れもしたし、しかし羨みもし、良い意味で敵対視もした。その後二十年の間、勤務する館を変りながら、ひととおりの美術館の仕事を経験して、時代に沿って勤めてきたつもりだが、そのなかで先述の矛盾するような状況にみえるにつけ、美術館とは何か、湧きあがる疑問が未だ止まらないのである。そうしたなか、一昨年、菅館長と、友の会会長の武田耕次さんと、鹿追で懐かしく語らせていただく機会があった。おふたりとも変わらず、熱く熱く日勝と、鹿追を語るのだった。それは年月を一気に縮めてくれた。

個人美術館の活動は、美術館そのものの活動が端的に集約されていて、美術館の意義の根幹を明快に示していると思う。作家作品、情報の収集、常設を基盤とした展覧会、普及事業。時代を経ても変わることはない、変わってはならない矜持がそこにあるといつてよい。いまや北海道の個人美術

館の代表格である神田日勝記念美術館は今も変わらず、館長以下、働く方々がより強い情熱で支えられているように思われる。活動を堅実に、実直に、ぶれることなく蓄積し、そして日勝を語り続け、鹿追を伝えていく。そうした姿が、なんと誇らしくみえることが。

終わらない問い、美術館の矜持とは、論理とは。それをかたどるのは何なのか。日勝記念館を考えるこの機会をいただいて、それはつまるどころ、作家への愛情なのだったと、やっと声に出していえるようになったかも知れない。



神田日勝記念美術館外観

平成二十六年年度

特別企画展

十月二十一日～十二月七日  
神田日勝記念美術館（入場者数 一一七四名）

# 「神田日勝の造形思考 〜キュビズム的多視点〜」

本稿では、特別企画展を終えた後の課題について、展覧会を振り返りながら述べてみたいと思います。

まず、昨年の開館二十周年記念特別企画展「室内における人間像〜その空間と存在」では、神田日勝の造形表現が戦後具象絵画の中で、河原温の《浴室》シリーズや密室の絵画の系譜に位置づけられるのではないかと興味で企画しましたが、日勝の空間表現の特徴である『狭さ』、言い換えると『平面性』はどこからくるのか、何に影響されたのか、どのように推移したのかという課題が新たに増えてきました。それで平面性という点で、《キュビズム》における多視点、つまり異なる視点から見たフォルムの再構成に着目し、日勝の空間表現をどうえ直してみようとしたわけです。

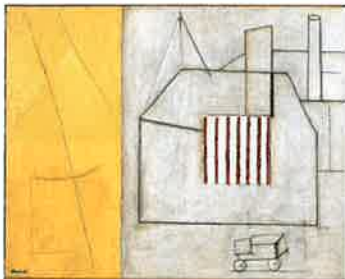
本展は、《キュビズム》をキーワードに関連作家の作品と比較し、また日勝作品の空間表現の変遷や主題との関連などに沿って、「ピカソとキュビズム」、「北海道の画家たちへのキュビズムの影響について」、「神田日勝の空間表現とキュビズム」、「素描における空間表現」、「風景画の遠近法的表現」の五部で展示を構成しました。出品作品は、キュビズムの創始者の一人であるピカソの版画《女の顔》を始

め、油彩では三岸好太郎の《コンポジションO-54》、難波田龍起の《北国の家》、小川原脩の《前へ進む群A》、橋本三郎の《牡牛》、十勝に縁のある画家としては岡田悟郎の《群像》など九作家、版画では北岡文雄の《Forme》と藤川叢三の《リトグラフィ》、素描では日勝の《家》や《家と人》など、全部で四十三点です。



小川原脩《前へ進む群A》1957

\*いずれも北海道立近代美術館 蔵



難波田龍起《北国の家》1953



神田日勝《ゴミ箱》1961

この中では、三岸好太郎の作品が一番古く一九三三年の作で、東京で見たフランスのキュビズムを含む当時の前衛美術に触発されて描いたものですが、出品作品は日勝と同時代という括りで一九五〇年代から六〇年代にかけて抽出したもので、日本の高度経済成長と情報化社会の出現に伴って、めまぐるしく転換していった美術動向とも連動していた時代です。



三岸好太郎  
《コンポジション O-54》1933頃  
北海道立三岸好太郎美術館 蔵

金澤恵子(神田日勝記念美術館 学芸員)

日勝の場合は、明確に「キュビズム」を意識して制作したように思われるのは一九六二年の二点の《家》で、フォルムの単純化やデフォルムを推し進めた過程が分かります。関連文献や書籍、情報は得ていたようです。

また、他作家の場合は「キュビズム」を造形理論としてとらえ、自身の作品の中に取り入れようとしているように思われますが、日勝は理論としての理解はもちろんですが、生来のものの見方やとらえ方が大きく反映しているようです。それは、一九六〇年の《家》や一九六一年の《ゴミ箱》など初期作品から絵画空間の奥行きよりも、ものの存在感の表出に力点が置かれており、このような日勝の空間のとらえ方が「キュビズム」に直接影響を受けたというより、「キュビズム」的な造形思考が付加されていったように思われるからです。



神田日勝《家》1962頃



神田日勝《家》1962頃

ギャラリートーク 10/25 (参加者数 24名)



ピカソのキュビズムから関連作品、さらに日勝の狭い空間表現からキュビズムとの共通点を説明しました。

ミュージアム・ミニ・コンサート 11/7 (参加者数 52名)



「バロックと近代の出会い」と題して、明楽みゆきチエンバロコンサートを開催。パッサリから武満徹まで解説を交えた演奏会でした。

美術講座 11/14 (参加者数 16名)



「ピカソのキュビズムの特質と神田日勝の造形思考」をテーマに、さまざまな映像も交え、日勝作品における空間表現の特徴とキュビズムとの関連について解説しました。

関連事業

◆作品リスト (主要作品)

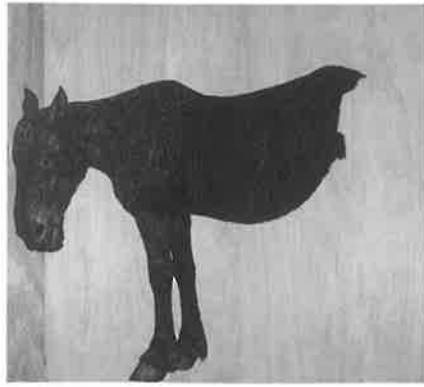
No	作家名	作品名	制作年	所蔵先
<b>油彩</b>				
1	三岸 好太郎	コンポジション O-54	1933年頃	北海道立三岸好太郎美術館
2	難波田 騰起	北國の家	1953年	北海道立近代美術館
3	松樹 啓人	家族	1954年	北海道立近代美術館
4	岡田 慎郎	[群像]	1955年	帯広市立緑丘小学校 (帯広市教育委員会)
5	亀山 良雄	図式の人間	1955年	北海道立近代美術館
6	小川原 脩	前へ進む群A	1957年	北海道立近代美術館
7	横本 三郎	牡牛	1957年	北海道立近代美術館
8	岸 葉子	観	1958年	札幌芸術の森美術館
9	神田 日勝	家	1960年	
10	神田 日勝	ゴミ箱	1961年	
11	神田 日勝	家	1962年頃	
12	神田 日勝	家	1962年頃	
13	神田 日勝	板・足・頭	1963年	北海道立近代美術館
14	神田 日勝	劇場の風景	1963年	
15	神田 日勝	「板・足・頭」のための習作	1963年頃	
16	神田 日勝	静物	1966年	
17	神田 日勝	画室B	1966年	
18	神田 日勝	画室C	1967年	
19	神田 日勝	画室E	1967年	北海道立帯広美術館 (帯広市より受託)
20	小谷 博貞	室内(アトリエ)	1969年	札幌芸術の森美術館
21	神田 日勝	馬(絶筆・未完)	1970年	
<b>版画</b>				
22	北西 文雄	Forme	1954年	北海道立近代美術館
23	パブロ・ピカソ	女の顔	1962年	(財) 荒井記念美術館
24	藤川 巖三	リトグラフ1	1967年	北海道立近代美術館

## 第一期常設展

### 「神田日勝、その画業の流れを追って」

四月二十二日～十月十九日(入館人数六二九四名)

「自画像」などの初期作品から、晩年の「馬(絶筆・未完)」まで、神田日勝の画業の流れを一九六〇年代の美術状況との関連や、表現の変遷を追って紹介しました。



「馬(絶筆・未完)」1970年



「自画像」1956年頃

平原社展で平原社賞を受賞した「馬」、全道展道知事賞の「ミ箱」などは、焦げ茶色を基調としたモノクロームで、自身の生活を見つめて細部まで克明に描いています。

一九六四年の「牛」は切り裂かれた腹の赤い色が印象的で、これ以降、色彩が次第に鮮やかになっていきます。

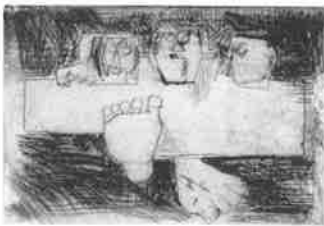
一九六六年から「画室」の連作に取り組み、壁や床の鮮明な赤にポップ・アート、六八年の「晴れた日の風景」や「人と牛」の連作は流動的な筆触で描き、アンフォルメルの影響もうかがえます。

一九六九年には「ハイと人」と「人間B」が全く異なる画風で描かれ、一九七〇年の「馬(絶筆・未完)」は「室内風景」とともに日勝晩年の作品であり、代表作にもなっています。

## 第二期常設展

### 「神田日勝の鹿追での生活、そして交流のあった作家たち Part 1」

十二月九日～二〇一五年四月二十六日(入館人数)五九二名(三月末現在)



「板・足・頭」1963年頃

神田日勝が鹿追で営農の傍ら絵を描いて生活していた日常の一端を、風景画や素描、家族の写真などで紹介しました。笹川の自宅周辺の「風景」や冬の農場を描いた「雪の農場」、素描では「人と牛」で搾乳をする様子など、自身の生活へのしつかりした眼差しが感じられます。

また、山本時市、おおとひでお、齊藤隆博、渡邊禎祥、徳丸滋、小室吏の六名と日勝の作品を併せて展示し、交流の一端を紹介しました。山本時市は、鹿追で教員の傍ら絵を描き、日勝とよく絵の話をして「板・足・頭」が寄贈されました。また、一時期日勝のライバルと言われたおおとひでおの寄贈された作品も展示しました。

### Facebook 開始!



7月1日からFacebookを開始。展覧会やイベント、日々の様子を綴っています。

### 芸術鑑賞 バスツアー



11月16日

釧路湿原美術館(阿寒町)・北海道立釧路芸術館(釧路市)(参加人数)38名

阿寒町では「佐々木榮松展」、釧路市では「やなせたかし展」を鑑賞。釧路湿原美術館では職員の解説が大変勉強になりました。

# 第二十回馬の絵作品展

十月七日～十四日 鹿追町民ホール

## 第20回 馬の絵作品展冠賞入賞者一覧

No.	賞名	学校名	学年	名前	前名	摘要
1	文部科学大臣賞	留萌市立港南中学校	3	檜森 夢佳		
2	北海道知事賞	千歳市立東千歳中学校	1	穂積 佳		
3	北海道教育委員会教育長賞	北海道教育大学附属釧路小学校	2	廣田 凱大		
4	鹿追町長賞	北海道教育大学附属釧路小学校	4	福士 大陸		
5	鹿追町教育委員会教育長賞	釧路市立鳥取中学校	3	大田 なつみ		
6	神田日勝記念美術館長賞	北海道教育大学附属釧路中学校	2	牛木 乙帆		
7	北海道新聞社賞	天塩町立天塩中学校	2	水戸 咲良		
8	十勝造形サークル委員長賞	鹿兒島県鹿屋市立細山田小学校	6	柳田 明里		
9	帯広市教育研究会図工美術部会長賞	室蘭市立海陽小学校	3	土井 隆之介		
10	J R北海道社長賞	北海道教育大学附属釧路中学校	1	佐野 史佳		
11	北海道電力(株)帯広支店長賞	旭川市立末広北小学校	5	島 沙雪		
12	帯広信用金庫理事長賞	静岡県焼津市立小川小学校	5	大塚 希紗来		
13	ホテル福原社長賞	函館市立高丘小学校	1	岡山 実聖		
14	審査員奨励賞	鹿追町立鹿追小学校				
15	北海道エンデュランス協会賞	鹿追町立上幌内小学校	4	宮下 愛菜		



文部科学大臣賞受賞作品



審査風景

今年の応募総数は九二二点。

「馬を描く場合は毛並やたてがみ、さらに尾などは風になびくので動きを表現するポイントとなります。今年も大自然の中で草を食んだり、走ったり、自由に動き回る馬に感動し、その姿をしっかり見つめ、描き上げた力量のある作品が多数寄せられました。」(齊藤隆博審査委員長 講評より一部抜粋)

## 馬の絵写生会

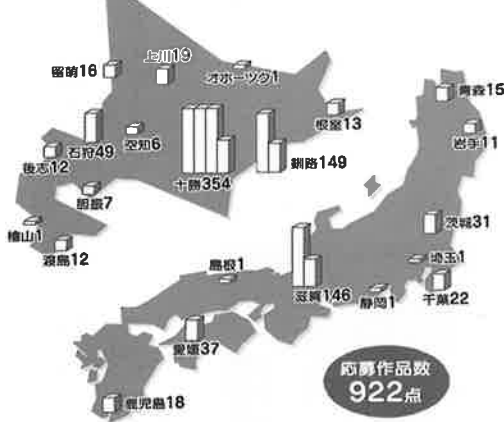
七月三〇日  
鹿追町ライディングパーク  
(参加者数 四十六名)

講師 脇坂 裕  
内藤 智香  
重野 真希

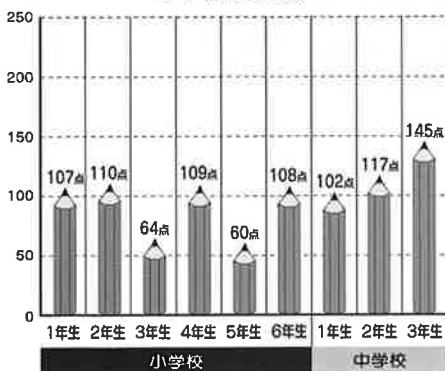
乗馬体験や馬に触れたりして、よく馬を観察して下絵を描き、水彩絵の具やクレヨンを使って仕上げました。完成した作品は馬の絵作品展に応募してくれました。



## 地域別グラフ



## 学年別応募数



## 馬の絵作品展表彰式

十月十二日  
鹿追町民ホール

馬の絵作品展の入賞・入選者対象の表彰式を開催、来場者は賞状と副賞の盾を受け取り、自作の前で記念撮影などをしていました。



## 「中村智恵美の世界展」

四月二十二日～五月六日  
神田日勝記念美術館（入場者数 七三四名）



中村智恵美作品

兵庫県姫路市出身で女子美術大卒。  
鹿追町が花の町でもあることから、精緻に描いた華麗なシャクヤクやユリなどの花や、リンゴなどの果物の静物画二十点を展示。  
二紀会会員、女流画家協会会員、日本美術家連盟会員として活躍しています。

## 「田川善立・佐藤美和子 二人展」

六月十七日～二十三日  
鹿追町民ホール（入場者数 六三三名）



本展は無鑿祭のコーラスアルシス合唱団のメンバー、佐藤美和子と師である田川善立の師弟展として開催。  
田川は吉田蒙介の「北海道美術をめぐる二十五年」の十勝における協力者であり、展覧会に向けて準備を進めましたが、田川の存命中には実現できなかったものです。

## 「第六回 美の棲む処」・art展 鹿追巡回展」

四月二十二日～五月六日  
鹿追町民ホール（入場者数 九七五名）



美術評論家・中野中の呼びかけにより、立体や平面の作家十一人による展覧会。  
洋画は浅見千鶴、石丸康生、伊藤行子、ササキ永利子、田村公、中野渡みね子、横田瑛子、日本画は辻智子、村田裕生、布立体は相本みちる、木彫は宮川達也の作品が出品されました。

## 「関連事業」 ワークショップ

### 「軍手で花を咲かそう」

四月二十日  
鹿追町民ホール（参加者数 二二二名）



講師に相本みちると伊藤行子を迎え、カラフルな軍手を花びらに見立てて組み合わせて丸め、モールや発泡ビーズなどで飾り、作品は鹿追町民ホールロビーに展示しました。

## 「おとおひでお展」

八月十日～八月十七日  
鹿追町民ホール（入場者数 五六八名）



来場者と談笑するおとと氏(左から2人目)



「サイロのある風景」1960年

富良野市出身で北海道学芸大学卒。一九五九年に寺島春雄に出会って大きな影響を受け、翌年荒土会創立に参加。この頃神田日勝にも出会い、一九六二年に全道展・道教育長賞、六四年に独立展入選と、一九六〇年代は神田日勝と同じ全道展と独立展に入選・入賞を果たし、一時期は日勝のライバルでもありました。  
本展は、一九六〇年代から二〇〇〇年代に至る半世紀に渡る画業を通観することができました。



# 展覧会事業実行委員会の展覧会く神田日勝生誕七十五周年記念事業

## 「窪島誠一郎・木下晋 絵本原画展」

八月十日～三十一日  
神田日勝記念美術館二階展示室（入場者数 八六七名）



木下晋「はじめての旅」絵本原画



窪島誠一郎「いのち」絵本原画

長野県上田市の「無言館」館主・窪島誠一郎の「絵本版無言館ができるまで」の絵本原画などと、鉛筆による細密描写で有名な木下晋の「はじめての旅」の絵本原画展を開催しました。

## 「第十五回 グループ環 鹿追絵画移動展」

八月十九日～二十九日  
鹿追町民ホール（入場者数 三五〇名）



香取正人「漁村」

所属団体や地域の枠を越えた道内の具象絵画の作家集団で、本展は十五回目。青野昌勝、猪狩肇基、池上啓一、枝広健二、岩佐淑子、香取正人、合田典史、佐藤順一、佐藤光子、中村哲泰、中吉功、西沢宏生、萩原勇雄、平原郁子、藤井高志の十五名。

風景画や人物画など親しみやすい作品が多く、八月二十四日には作家による作品講評も行われました。

## 関連事業 木下晋 ギャラリー・トーク

八月二十四日  
神田日勝記念美術館（参加者数 二十名）



馬耕忌の会場では映像を放映し、自身の画業の変遷や表現の特徴などを紹介し、ギャラリー・トークでは「はじめての旅」の絵本原画の前で制作経緯を語りました。

富山県での少年時代、困窮のなかで、母親に連れられて放浪の旅をした体験は、後の画業にも大きな影響を及ぼしたそうです。

## 「馬と羊のいる風景 く村上陽一・鎌田朝緒展」

十二月二十六日～二〇一五年一月七日  
鹿追町民ホール（入場者数 二二五名）



鎌田朝緒作品



村上陽一作品

干支にちなみ馬と羊を題材にした作品展。

村上陽一と鎌田朝緒は帯広市在住で二紀会北海道支部に所属、道展に出品するなど活躍しています。

## 「池田龍雄展 我が心のなかのメルヴェーユ」

十二月九日～二十三日  
神田日勝記念美術館二階展示室（入場者数 一〇五名）



池田龍雄「青い吐息」

アヴァンギャルト芸術運動に参加し、戦後具象絵画を代表する作家の一人である池田龍雄の作品展を開催。

当館で以前開催した「神田日勝と新具家の画家たち」展にも関係する画家で、今回は二十七点の版画を出品しました。

## 関連事業 池田龍雄講演会 ギャラリー・トーク

十二月八日 鹿追町民ホール・神田日勝記念美術館  
（参加者数 五十六名／三十八名）



自作を前に語る池田龍雄（左から2人目）

日勝祭の開催に併せ、池田龍雄の講演会「自作と神田日勝を語る」、またギャラリー・トークは自作を前に行われました。

アヴァンギャルト芸術運動では岡本太郎や安部公房らと活動し、文学や映画など多くのジャンルの人々と交流し、前衛美術家として活動を続けています。

神田日勝と同じ東京練馬の出身であることや、日勝の作品については「鉄やさびの匂いを感じる」と語りました。

## 第二十回 藝壇祭

六月十七日 神田日勝記念美術館 鹿追町民ホール  
(参加者数 二七七名)



女声合唱団アルシス



交流会でじゃがいもに舌つつみ

二代目館長の故高橋揆一郎氏の命名による「蕪壱祭」。帯広を拠点に活動する女声合唱団アルシスにより北原白秋の「赤い鳥小鳥」などを展示室で熱唱し、交流会でもアンコール演奏しました。ワインとチーズ、友の会有志の手作り料理も楽しんでいました。

## 第十二回 日勝祭

十二月八日 鹿追町民ホール 神田日勝記念美術館  
(参加者数 五十六名)



池田龍雄氏



吉田鹿追町長のあいさつ

神田日勝を語る」と題し、記念講演が町民ホールで行われました。前衛美術家としての半生と、同郷である日勝の作品の印象を語り、展示室のギャラリートークの後、ロビーで交流会が行われ、日勝の生誕を祝いました。

神田日勝の生誕を祝う「日勝祭」。池田龍雄作品展のオープニングに併せ、「自作と

## 第二十二回 馬耕忌

八月二十四日 鹿追町民ホール  
(参加者数 五十八名)



菅館長（左）と上木和正元々張市美術館長

神田日勝の命日に近い日曜日に毎年開催している馬耕忌も二十二年目。今年度は、四部構成で、一部がグループ環の作家による作品解説、二部が木下晋講演会、三部が

菅当館館長と上木和正元々張市美術館長による館長対談、四部が交流会でした。



グループ環の作家による講評



田中光俊氏

館長対談では、「地域美術館の役割を語る」と題し、夕張美術館の設立の経緯から閉館に至るまでと、現在の活動の一端と、建物はなくなつたが、コレクションはあり、その管理と他館での展覧会に携わっていることなどを語り、恒例となつた田中光俊氏のギター演奏が色を添えました。

## 美術講座

十一月二十六日 神田日勝記念美術館  
(参加者数 十七名)



講師 寺嶋 弘道(北海道立近代美術館 学芸部長)

「先人記念館の今日、明日 美術館は誰のもの、または、美術館の行く末」と題して、美術館の本質的な意義から、ミューくん検定という四折形式のクイズ、さらに博物館の定義、個人作家美術館の今後に至るまで興味深い内容で展開されました。

## 館長講座

平成二十七年二月二十日 神田日勝記念美術館  
(参加者数 三十五名)



講師 菅 訓章(神田日勝記念美術館長)

神田日勝記念美術館の設立の契機となつた鹿追の「らんぶの会」のこと、発行した「ほうし」や「神田日勝」の冊子のことなど、草創期から携わつた経緯を話し、九五六年頃の「風景」や五七年の「馬」など作品の映像と作品にまつわるエピソードなどを語りました。

感想ノートより ②9

日々の生活、仕事、そして絵を描くこと、どれにも喜びがあるようです。ただただ楽しくて、ほめられればまた嬉しくてたまらない、そんな純粋な人柄がしのべれます。 7/1 岩手県盛岡市

神田日勝さんの世界を知るには開高健氏の「ロビンソンの末裔」を読むとよくわかると聞いて読みましたが、戦後の大変な北海道の暮らしの世界で、相当にショックでした。現代の鹿追が当時の状態に近いのではないかとずっと思っていたのですが、とても明るい空の下に広がっている街に安心しました。実物の絵に接して、とても興奮しています。また観たいと思いました。 7/31 青森県弘前市

腹を切り裂かれた牛を描いた「牛」、鳥、魚、果物等を描いた「静物」、「馬」…人間は、命を頂いて生きている、ということをもざまざと突きつけられ、「命」の尊さを身をもって感じさせてくれる、作品たちだと思います。絵の中にすごい命のエネルギー、存在感を感じます。北海道鹿追もいつも見ている、これぞ鹿追という風景。農業をしながら絵を描く人ならではのリアルな目線。本当にすごいです。私も農業で働いているので、共感します。 8/19 A.O.

寄贈作品紹介 (平成26年度)



池田龍雄「青い吐息」他1点



おおとひでお「北の砦の大将」他6点



大原裕行「鹿追、雨降る」



岡本淳子「旅の途中」他3点



中西堯昭「緑の階調」

第45回 北海道教職員美術展(地方移動展)in鹿追  
平成27年1月21日~27日 鹿追町民ホール



北海道の教職員による絵画、立体、書道、写真による一般と招待作家による展覧会で、力作が並びました。

関連事業~ギャラリートーク・写真教室・書道教室  
平成27年1月24日 鹿追町民ホール



絵画が板谷諭使、写真が渡邊登、書道が清兼孝生の各氏によるギャラリートークと、写真と書道の講評と実技の教室を実施しました。

新画集 8月27日より発売開始



NHK・Eテレでの神田日勝の特集番組を契機に画集が完売。今回編集し直し、代表作など76点を収録。日勝の32年の年譜、菅館長と土方明司、佐藤友哉両氏の日勝評も転載。1冊2,500円で当館のみで販売。

「美術屋・百兵衛」で神田日勝特集



季刊の美術専門雑誌「美術屋・百兵衛」第30号で神田日勝が20ページにわたって取り上げられました。表紙に「馬(絶筆・未完)」、巻頭特集で「画家である。農民である。」をテーマに日勝の画風と心境の変遷を紹介しています。当館では完売。

「井浦新の日曜美術館」で紹介



NHK・Eテレの「日曜美術館」の司会、井浦新のエッセイに当館が取り上げられています。取材時に当館を訪れ、神田日勝の「馬(絶筆・未完)」などの作品群に触れた思いが綴られています。1冊1,728円で当館でも販売。 ※上記の書籍は税込価格。

## 美術館の学校活用と学校での展覧会



笹川・通明保育所の子も達



新得町立屈足中

今年度は、道外から大阪府や埼玉県の農村ファームステイ、町外は帯広市や新得町、上士幌町の小中学校、町内は鹿追中、鹿追小、上幌内小、笹川・通明保育所から児童・生徒が来館してくれました。上幌内小では学芸員の出前講座も行い、次年度以降も増えそうです。

また、瓜幕中では瓜中ギャラリーと称して作家の展覧会も開催しました。

## アート・キッズ・クラブ

5月17日～平成27年2月21日  
鹿追町民ホール  
[参加人数]43名



「日勝さんの絵の続きを描こう」「でっかいバルーンを作ろう」「水でっぼうで遊ぼう!」「クリスマス★リースを作ろう」「そりを作って遊ぼう」の内容で5回実施。参加者は外で遊ぶための工夫もしていました。

町内の一般9名と鹿追高校ボランティア同好会の生徒が子ども達の手助けや準備と後片付けをしてくれました。



## 子ども芸術鑑賞ツアー

8月7日  
中札内美術村・とちち帯広空港  
[参加人数]43名



中札内美術村では相原求一朗美術館と北の大地美術館とTシャツデザイン展、とちち帯広空港では航空機の離発着と化学消防車を見学。間近で見ると迫力があり、貴重な体験でした。

### 「自分の思いをこめた馬を作ろう！」



夏

8月12日 鹿追町民ホール  
[講師]藤原千也  
[参加人数] 17名

アルミの針金の芯材で馬の骨格を作り、麻ひもを巻き付け紙ねんどで肉付け。作品はロビーに展示しました。

### 「ひつじをデザインしたラテマグを作ろう！」



冬

平成27年1月9日 鹿追町陶芸工作館  
[講師]陶芸工作館講師  
[参加人数] 25名

手ろくろを回して器状にしてから、黒いねんどでひつじの顔などをつけて焼成。器作りに苦心しました。

### 「古代人のアクセサリー まが玉を作ろう！」



春

平成27年3月26日 鹿追町民ホール  
[講師]伊藤明美・藤井利江  
[参加人数]38名

柔らかい石を紙やすりで削ってみがき、まが玉のアクセサリーを製作しました。

## 親子ワークショップ



11月22日 鹿追町民ホール  
[講師]内田芳恵  
[参加人数]41名

「キラキラの冬☆ ダンボールで迷路盤を作ろう!」というテーマで実施。スパンコールなどで飾り、ビー玉で遊べる迷路盤を作りました。